

推薦図書インタビュー

橋爪大三郎教授 1 過去・現在・未来を自由に行き来できる理論社会学



橋爪大三郎の3冊

- クロード・レヴィ=ストロース『親族の基本構造』
- ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』
- 山本七平『現人神の創作者たち』

私が社会学に出会ったのは高校時代でした。進路を考えるために、図書館の本棚にある本を片っ端から読んで、社会学の本を見たらわかりやすい。これなら自分にもできそうだなと思った。目の前にある社会が研究対象になっている。それまで社会をそのまま研究対象にしてもいいとは思っていなかったのです。理工系の学問は向いていないと思ったし、経済学も政治学も特殊すぎて、興味がわかなかった。社会学の存在を知って、雲が晴れていくような開放

感を感じました。そこでさっそく、『講座社会学』全10巻(東京大学出版会)を入手して、全巻読みました。

ところが、大学に入ってみたら社会学がつまらなかった。大きく学ばずの大学で、小さく学んでいた。専門がなんの役に立つのか、どういう文脈があるのかという疑問を痛切に感じた。また、実証的な社会学は、今ある社会しか調べることができないという点で不満を感じました。なくなってしまう社会は調査できない。でも、理論社会学は、可能なあらゆる世界、過去・現在・未来についてのあらゆる世界について考えることができる。自分は大きく学ぶ理論社会学をやってみようと思ったのです。

17歳からレヴィ=ストロースの構造主義に出会うころまで、私は権力に反対しようとしていました。でも社会には権力はある。否定すべきものを説明の対象にするのは、なかなか難しい。疎外論になる。マルクスもフロイドもラカンもフーコーも、現代社会は間違っていると、現代社会の中で主張するのは、現代思想の矛盾がここにあって、消費社会に生きる者の罪責感の上に成り立っているのではないかと感じました。権力が悪であるというのは、そういう罪責感のシンボルみたいなもの。これにはまったら社会科学はできないのではないかと。そこで80年代に入って、断固権力の存在を肯定してみようと考え、今に至っているのです。権力は悪であると、いくら書いても自分のためにしかならない、人を伝える言葉が出てこない。読者に理解可能な学問を生み出すためには、この問題を避けて通れないと思った。書きながら、自分の考えを整理していった。それに随分時間がかかってしまったように思います。

・橋爪大三郎研究室

Posted by valdes on April 24, 2006

推薦図書インタビュー

橋爪大三郎教授 2 構造主義に出会うまで

私の大学時代は、ベトナム戦争があって学生運動が盛んでした。その学生運動を支えていたのが、マルクス主義。高校のときに大学では社会学をやりたいと友人に言ったら、お前とは絶交だと言われた。レーニンが、社会学はブルジョワ科学だと言ったので、マルクス主義は社会学を認めないのです。

大学に入ってから、マルクス主義の本を沢山読みました。非常に面白かった。マルクス主義は、日本で「創造的に発展」していて、吉本隆明さんとか、宇野弘蔵さん、黒田寛一さん、田中吉六さん、三浦つとむさん、羽仁五郎さんなど、多くのすぐれた人たちがいた。なぜ日本で独自に発展したのかは、興味深い問題です。もともと江戸の知識人は下級武士や食い詰めた商人で、体制から疎外された人びとが儒学を勉強していた。知識人は、長屋の片隅で大根のしっぽをかじりながら寺子屋なんかをやって糊口をしのぐ、というのが日本の伝統だった。体制派では学問はできないというのが、マルクス主義、社会主義と似ていたのかもしれない。ソ連や中国は成功したマルクス主義なので、体制派で、現実と妥協しているのです。政権を担当するのですから当然でしょう。日本では食い詰めた人びとが夢を描いたので、創造的発展になった。

日本のマルクス主義の著作には、ふつうのマルクス主義ではないことがいっぱい書いてありましたが、それでもマルクス主義。どれが正しいかで悩む。当時は、今日デモに行くかどうか、友達と論争になったら何と言うか、毎日自分なりの判断をしなければならない時代でした。行動する知識人になろうとすると、アカデミズムもまったく役に立たない。このまま現実と折り合わず、現実が間違っているとして生きていくのなら、赤軍派になるしかない。これはいくらなんでも、ちょっとおかしいぞ、と思っていたときに出会ったのが、レヴィ=ストロースだったのでした。

最初に読んだのは『構造人類学』の英語版。レヴィ=ストロースはマルクス主義をくぐって来た人で、マルクス主義とはまるで異なる考え方をしている。しかも、転向とは違って、マルクス主義を越えてつぎの地平を切りひらいたのだと思う。構造主義という新天地に、私は大変な開放感を感じました。これまで考えたことのないような発想で出来ている本で、実に新鮮だった。そこで、修士論文の研究テーマを、レヴィ=ストロースの著書、『親族の基本構造』に決めたのです。で、どんなことがわかったかと言うと、それは私の『はじめての構造主義』(1988年講談社現代新書)に書いてあります。



Claude Lévi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté*, 1949, PU F.

クロード・レヴィ=ストロース 馬淵東一・田島節夫監訳『親族の基本構造』1977年 上・下 番町書房(現在入手可能なものは、福井和美訳『親族の基本構造』2000年 青弓社 ¥14,700)

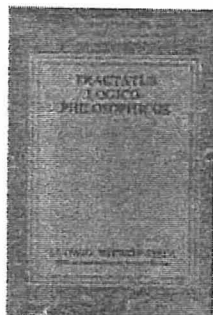
Cafe VALDES

東京工業大学 社会理工学研究科 価値システム専攻ブログ

<http://www.valdes.titech.ac.jp/mt/2006/04/27-145447.php>

推薦図書インタビュー

橋爪大三郎教授 3 世界を言葉で記述する



大学院の入試に、ドイツ語と英語がありました。それをいっぺんに勉強できてちょうどよかったのが、『論理哲学論考』です。これは、英独対訳になっている。独文科を受験する友人と、一緒に読みました。毎回担当を決めて、喫茶店で半日ねばって、一年かけて読みました。5時間かけて10行しか進まない、なんていう日もあった。こういう本は、読むのに時間がかかるのです。ヘーゲルもそうですが、コツが掴めるまで時間がかかる。

『論理哲学論考』は、世界をこの本一冊に閉じ込めてしまおうというヴァイトゲンシュタインの野望の産物です。この点は、ヘーゲルやマルクスにも通じます。彼らは、メビウスの帯のように、螺旋状にさまざまな要素を配置して行って、世界が複雑に生成するその動きを捉えようとする。いっぽうヴァイトゲンシュタインは端的に、世界に生じていることを残らず記述しようとする。それを読むと、「世界はこうです」と端的に言い切っているこの人はいったいどこにいるのか、という疑問が浮かびます。私の答えは、「この本の外にいる」。本には「ひとりしかいないので独我論です」と書いてある。それを読む私は、自動的にヴァイトゲンシュタインになってしまう。彼と同じ場所に立って、なるほどここに世界がある、と思う。けれど、それを認識している私だけは、その世界の中にいない。これにはちょっと、精神的な危険を感じるでしょう？

当時の私は、たった一人のための世界の話だから、これは社会学には絶対ならないと思って、それ以上ヴァイトゲンシュタインの仕事を抑り下げなかった。しかし晩年のヴァイトゲンシュタインは、『論理哲学論考』の立場を捨てて、「言語ゲーム」(language game)という、人間が大勢存在する話に取り組むのです。あとでそれに気がついて、それなら社会学に使えると思いました。

Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, 1921.
ルートヴィヒ・ヴァイトゲンシュタイン 野矢茂樹訳 『論理哲学論考』 2003年 岩波文庫
¥735 (他にも数種邦訳がある)

Posted by valdes on April 27, 2006

Cafe VALDES

東京工業大学 社会理工学研究科 価値システム専攻ブログ

<http://www.valdes.titech.ac.jp/mt/2006/04/28-063421.php>

推薦図書インタビュー

橋爪大三郎教授 4 問題を個別に、初心に立ち返って、解決すること

権力の存在を肯定してみようと考えたのは、この世の中には、存在してはいけないものは存在していないはずで、存在しているからには、何か理由があると思うようになったからです。それでも、現実の社会には、まずいことがいろいろ起こっている。戦争とか経済問題とか環境問題とか…。そういう問題を解決する場合に、ポーカーの全とつかえみたいに、この社会を丸ごと変えてしまうことはできない。そういう革命みたいなやり方ではなく、カードを一枚ずつ、変えていく。プラグマチックに、実践的に、功利主義的に、大勢の人びとの同意をえながら解決していくほうが無理がない、と思えるのです。全とつかえは、相当数の人びとがそれまでの積み重ねてきた人生を失ってしまうということ。そういうやり方に人びとが支持を与えるのは、人びとが本当に絶望したときしかない。産業社会は、科学技術によって生産力を高め、資本を蓄積して、人びとが幸せを追求する可能性も広がる社会であるはず。産業社会を否定しても、どうしようもない。それより、初心に立ち返って、問題を個別に解決するのが、社会科学の役割ではないか。そういう言葉が手に入る気がしたのです。



こういう見方をすると、リベラリズムや近代主義はよくできていると思います。ホップズ、ロック、ルソーらは、みんな本気で自分の言葉で話していて、それで社会が形づくられ、近代が出来あがった。

ここで問題は、日本という存在です。ヨーロッパ近代と接触した日本は、人まね小猿みたいに、そういう土壌がないところに、いきなり近代の制度だけつくってしまった。「ドリトル先生の郵便局」というのがありますが、しくみがわかってないのに、いきなりポストをつくって手紙を入れてしまったようなもの。それでも、鉄道や運輸や工業など、技術と資本と訓練で解決できるものは比較的うまくいきました。一番弱いのはソフトウェアの部分。宗教、哲学、思想、芸術などが絡んだ問題では、ギャップが大きすぎて空回りしている場合が多い。その隙間を、土着のものが埋めました。その典型が天皇制です。そうやって、なんとか近代の制度を回して行った。日本では、前近代と近代が一緒に組み合わせられて動いています。こういう不思議な仕組みは、あまり見られない。これを解明することは日本社会を解明すること、すなわち、日本の社会科学者の大事な課題だと思います。

山本七平さんのこの本は、山崎闇斎を中心としたグループが、天皇が神であるというアイデアをどのように思いつき、江戸幕府よりも天皇が日本社会の正統性の規準になることを論証して行ったかを考察した本です。山崎闇斎は、僧侶から儒者となり、最後には神道を創始した特異な人物です。その学統は、明治維新の源流となった。山本七平さんはアカデミズムの学者ではないけれども、本質的でない仕事をされている。せつかく近代の価値観や思考方法を学ぶのであれば、日本社会が抱えている問題も根本から考えてみて欲しいと思います。

山本七平 『現人神の創作者たち』 文藝春秋社 ¥1,800

Posted by valdes on April 28, 2006

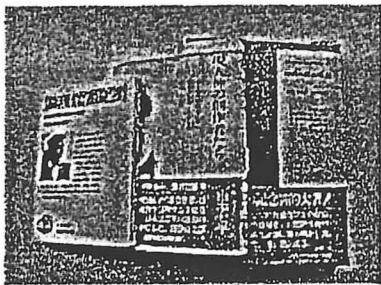
Cafe VALDES

東京工業大学 社会理工学研究科 価値システム専攻プログ

http://www.valdes.titech.ac.jp/mt/2006/04/28-064023.php

推薦図書インタビュー

橋爪大三郎教授 5 afterword



いま、橋爪先生は「仏教リバイバル」ということを構想されています。宗教社会学についての研究をされる中で、『家庭でできる法事・法要』(径書房)という本を計画しています。宗教改革を経なかった日本の仏教を、自覚的に捉え直す試みです。子供が宗教を毛嫌いしたりせず、日常の中にきちんと仏教的伝統を位置づけるためにどうしたらいいか、ということを考えているそうです。それには、原典を読むのがいいということで、阿含経系の法句経などをお坊さんにお願ひして、漢文を総ルビに注解をつけて、家族で

お経を詠んでセレモニーができるように構成されています。乞うご期待！

大学での新しいプロジェクトとしては、「世界文明センター」(Center for the Study of World Civilizations)の設立に尽力されています。これは、科学技術と文化・芸術のコラボレーションを目指し、東工大が新たな知の発信の場となるための企画です。人文学院と芸術学院によって構成され、先生は人文学院のさまざまな講座、ゼミ、シンポジウム、講演会などを企画されます。Civilizations の"s"の部分重要で、多様な文明、文化を既存の学問の枠組みを取り外して、自由に学べる場を提供するというプランです。大学としてメッセージを送ること、大岡山の近所の人にも来てもらえるような地域密着型、地域に開放された大学の活動を目指しています。

VALDESについて、橋爪先生は政治を志望する人にもっと来て欲しいと願っています。実は、日本の総理大臣になる人材を輩出するというビジョンがVALDES設立時からあるのです。去年、先生は松下政経塾で講義をする機会があり、「学力は負けてないけど、根性が違う」と感じたそうです。「彼らが自分の志に賭けている意気込みが伝わってきた。政治家は、選挙に出て投票してもらって、有権者の支持を受けて、やっと大きな仕事ができる。政治家は、事業家であり起業家。自分ひとりでは政治はできない。うねりを起こし大きな波を起こして、実際に何かを変えていくことが政治だけれども、それは意思しなければ絶対できない。意思決定とはそういう場のはずだ。志に賭ける覚悟と根性のある人にVALDESに来て欲しい。VALDESもつアカデミックのバックグラウンドを最大限に活かして、大きな仕事をする人材を育てていきたい」という熱いメッセージを最後に頂きました。(取材・文・写真 土谷真喜子 6期)

橋爪大三郎研究室

Posted by valdes on April 28, 2006

『樹が陣営 31』 2006. July p194-201 編集工房 樹が陣営 2006. 7. 30 発行

【本を薦む】
橋爪大三郎著
『隣のチヤイナ』(夏目書房)

中国に長らくコミットしてきた著者が、当地の知識人との豊富な対話を交え、最良の入門書を書いた。それが本書である。
本書は、著者単独の論文と、対談集とが、ほぼ交互に配列される構成を取っている。それらが書かれた時期は、著者と中国との関わりの長さを反映するよう、おおむね九〇年代以後の全期にわたる。
こうした構成の本書は、単一の論点を追求するものではない。整理するためには論点を抽出せねばならず、そこには読者の恣意が関わることを得ない。編集部からは「書評の形とらわれず、自由に論じて」と伝えられているが、その意趣は甘えることとする。
私が見る所、本書を書く問題関心は、中国における「運動」・「改革」・「格差」である。これらの問題関心は、現在の日本でも多く論じられて

こうした格差は、即ち本が推進した改革開放以後、変化を見せる。中国は、社会主義市場経済をいっ、前例のない体制をしくこととなる。市場経済と一党独裁政治の組み合わせは、アジアにもなり得るが、現在の中国はむしろ開発独裁国家の一種とされる。
私も、即ち本体制以後の中国は、開発独裁、あるいはより一般的に「開発主義国家」として解説できると思う。日中の差異と共通点の同業性を考える時、この視点は極めて重要だと私は考えているが、それについては本稿の末尾でまた触れることとする。いずれにせよ、現代中国の課題は、この開発主義体制が、グローバル化の進展の中で萎らざるをえない変化に関わるのであり、それが「運動」および「改革」という論点とつながっている。

2. 運動
「運動」は、「改革」の語とも言うべき位置づけである。全共闘運動と関わりが深い世代に属する著者は、同時代の文化大革命と日本の運動とを比較した経典「紅衛兵と全共闘」(一九九六)を本書に収録している。この運動は、当然さうたる異なった背景を持つものであるが、あえて共通点を探せば、以下の三点である。

似て非なる国の行方 高原基彰

るものだ。すなわち、「全共闘運動の問い直し」であり、「構造改革」であり、また「格差の拡大」である。
ところが本書は、「中国と日本は、まるで似ていない」と、挑発的な書き出し始めている。本書が優れた入門書であるのは、通俗的な比較論に陥らず、あくまで中国に内在する形で、現代的な課題を考えるための題材を提供しているからである。まずは著者の論点を、上の三つの論点ごとに通底する「文化的な差異」という点を加え、概観することとする。

- 1. 文化
著者による書き下ろしの冒頭論文「チヤイナ原論」では、中国の文化的な特徴が述べられている。その論点は、「多様性」および「官僚制と血縁集団」と要約できるように思ふ。
まず「多様性」について言えば、中国は大きな

194
国土を持つ、自然環境も場所によっても多様であり、民族・文化集団も多様に存在している。その象徴が、発音が異なっても議論の多様な「国際語」としての漢字である。
多様性にあふれた社会の統治として、「官僚制」を採擇した。伝統的な中国社会の基本構造とは、頂点に皇帝を置く、ヒエラルキー型の官僚機構が、その視野に「一定の自律性を持つ地域社会が、それそれにより下がっているものである。統治者としての皇帝と、科挙による選抜機構の整備が、その基盤となる。
末端に存在する地域社会は、父系血縁集団(「宗族」)を基本単位としている。官僚制をし、中央政府が、農民区札を契機に崩壊し、入れ替わってきた中国伝統社会は、社会の末端での血縁集団の結束が非常に強くなる。そのため、中央に強固な官僚制が存在しつつ、末端組織の側も強固になるという、一種の両義的な状態が生まれることとなる。
著者によれば、こうした文化的要因は、中華人民共和国の建国後にも継承している。特に改革開放までの共産党の統治は、かつての皇帝を「党中央」に置き換えた官僚機構と、一定の自律性を持つ自治自足生産・社会管理組織(「単位」として構成されたもの)を継承される。

著者は言う。
1) 米ソ冷戦構造の中で、ソ連の役割に異を唱えざるを得なかった。
2) そのため、従来の農業は相対的に弱かった。
3) 大衆の叛乱にもついてもみ成り立ち運動であったこと。
歴史に対する著者の総括は、以下の一文に集約される。「紅衛兵の文化大革命が、日本の新左翼・全共闘も、世界革命の五ネネキーが冷戦の壁に阻まれた一時期、それでもなお純粋な革命の理念を「国内」で追求した運動、と理解できる。どちらも非現実的で、革命の条件を欠いたことで、自壊し、暴力に明け暮れるうちに、人びとの信譽を失っていたのである」(二五三)。
こうした著者の、運動へのこだわりと諦念のない態度になった背景は、現地の知識人との対話にも現れている。この点で重要なのは、一九八九年の天安門事件(六四事件)であるが、中国国内にまたこの事件の経緯が繰り返されていないこともあり、著者の論評も慎重である。
藤津(社会学者)との対談では、海外で報道された機嫌の少なからぬ運動の内裏の一面が詳

しく語られる。興味深いのは、学生運動の内部に「文化」との関わりがあったことである。藤津によれば、中国は一九八五年頃から「文化熱」(文化一熱)が起きた。これは討論の自由が充分にはなかった当時、文化という領域で、思想の解放を試みた動きでもあった。現代芸術の分野でも「政治波瀾」という動きがあり、六四事件に連なる街頭抗議行動に合流していったのだ。しかし六四事件後、即ち本の再巡講和に端を発する改革機運の産み出しの中で、文化一熱は消滅し、人々の関心は金儲けに、学術界の関心も教養と秩序形成に向いていった。
王唯明(中国文字学者)との対談では、文革で革命理想が支配的イデオロギーとしての地位を失った後、統治の合法性を生み出すために政権に繰り出されたのが「小廉」イデオロギーであるともいえる。知識人は、この支配的イデオロギーを認識するのには失敗し、六四事件以後には強烈な失望感に陥ったとされる。
著者は直張明言していないが、こうした運動の経緯は、日本の学生運動が「生活保守主義」の中に消えていったの、明らかにチヤイナが異なるだろう。中国における私の同世代が、文

革は別としても学生運動の歴史に寄せる視線の冷たさにも、似た感覚がある。

今現在意味を持ちうる論点は、左翼運動論ではないだろう。その先を考えるために必要なのが、次の「改革」という論点である。

3. 改革

まず、一九九四年に行われたという王輝との対談「中国の官僚制の将来を見てみよう」。王は自身が地方官僚の出自でありながら、中国における分厚い官僚制が、民衆に対し高圧的で、かつ極めて非効率な、お役所仕事に明け暮れていることを批判した。橋爪が問題を寄せた「中国 官僚天国」という著作が、日本でも出版されている。

かつて舌鋒鋭く、中国における非効率な官僚制の存在を、長い中国史の中に位置付けて論じた王は、「ここでは官僚制は改善されつつある」として、楽観的な見通しを述べている。著書の中でも王は、改革の推進とはすなわち市場経済化であり、官僚の既得権益や非効率性は、さらなる市場化で改善されるはずだと述べていた。進行中の改革の中で、政府の役割はマクロ経済の調整に限定され、企業が市場で活力を

発揮する余地が広がっているという。官僚が官職を捨てて民間起業家に回ると「下海」の動きも進んでいるし、市場を下支えする法制の整備も進んでいるとされる。

これに対し橋爪は、王自身も指摘する、行政の効率化の遅れ、および腐敗の深刻化を取り上げる。橋爪は、王の「シャリオ」を批判し、政府がマクロ調整だけでなく、規制・許認可などの権限をまたたくさん持っているからこそ、腐敗が進行している点を強調する。

橋爪の論文「中国の『現代化』と日本の『近代化』を比較する」(一九九二)では、一九七五年の第四期全人代から提唱され始めた「四つの現代化」(工業、農業、国防、科学技術)と、八〇年代の日本の制度改革とを比較している。行政改革・法制改革・政治改革そして日米構造協議として、それぞれに未完の部分を残した八〇年代日本の改革と、現在の中国の動向とは確かに類似している。

同時に著者は、中国における改革の相違点を腑分けする。特に重要な相違は、失業問題と農村問題であろう。戦後日本の、復員兵・徴用工などを中心とした失業を詳らかにし、技術や教育の土古があたために、戦後復興が起されば即戦力として再吸収されることのできた。

雇用創出のために、サービス産業を中心とした非正規雇用を活用することを提唱している。胡の提唱からは、激烈なスピードで発展を遂げつつある中国の抱える困難さが浮かび上がってくる。とりわけ、日本では言えぬ間に数十年を挟むような、まったく異なる時代区分に属する問題が、現在において同時発生しているのである。たとえば、電信などのインフラの建設と、インターネットを初めとする新産業の活用と、あるいは、農村からの労働力の流入と日本でのフリーターと呼ばれるような非正規雇用の活用問題である。

結 社会流動化と監視社会

以上、本書を概略的に紹介されている。現代中国の抱える社会問題をさつくりと整理してみた。私は中国の専門家ではまったくないが、最後に、著者より若い世代から見えた視点をいくつか提示したい。

第一に注目すべきなのは、非正規雇用の増大が、日本では問題とされているのに対し、中国都市部における打工者の仕事は、日本でフリーターが担っているものにほぼ対応している。胡らの発言においては、失業の解決策として肯定的に論じられている点だ。

しかし中国における農民には、そうした土古がない。

また日本は、農村人口を漸進的に都市へと流入させ、かつての雇用の確保と所得の分配に成功してきた。しかし中国の場合は農村人口の絶対数が多過ぎるため、相当先まで農村を農村のまま維持する必要がある。

こうした論点は、まったく異なる歴史的文脈の中から、日中が「改革」という共通の問題の中を生きていくを得なくなったことを描き出している。「改革」を評価する際に、避けることのできないのが、それによる格差の調整という問題である。この点に、日本と中国の同時代性が最もよく現れているように思う。

「格差」という論点は、上記三つの論点すべてに関係し、現在の両国の最重要課題である。本書の中で最も大きな分量を与えられている。

胡鞍鋼(社会学者)との対談も、主な議題は「格差」の点になっている。胡は、本書の登場人物の中で、中国国内で比較的大きな分量を与えられている人物である。

胡によれば、中国の経済成長率は、一九九五

日本におけるフリーター層は、正社員に手厚い福利厚生を行き渡らせる「日本的経営」が、田舎世代の年齢上昇ともない維持不可能になったという歴史的タイミングの中で、それでも押し寄せる景気変動から正規雇用を守る緩衝帯(バッファー)として、意図的に増大が目標されたものである。

そこには同時に、第一次→第二次→第三次という、単線的な産業進化論に裏打ちされた、サービス産業に対する認識の見誤りがあった。英語圏の社会で、すでに八〇年代半ばから指摘されていたように、サービス産業は単なる「産業の高度化」でも「省エネ化」でもなく、ショップ店員のような、新しい形の非熟練・不安定雇用の労働(「袋小路職」(Dead-end job))として社会の中に増大させるものでもある。

そう考えれば、胡鞍鋼が農村問題の解決として強調する、サービス産業の進展や、非正規雇用の拡大は、弥縫策に過ぎないものかもしれない。今現在、農村からの出稼ぎ者は、農村に留まるよりもマシだという一点、極めて劣悪な都市での労働に従事している。しかし、彼らが自分の境遇を考える際の基準(準拠集団)は早晩、農村ではなく都市の隣人たちに移行するだろう。

さらに「都市で働ける」という彼らの唯一の希望が、消滅したのだろうか。最も典型的には、不況になった時である。中国の歴史はほぼすべて、農民の動きを発端としてきた。現在すでに散発している地方の農民反乱は、当地の役人の腐敗に先を向けたものであるが、「都合の良い低賃金労働力」として調達されていくことへの不満が堆積して、反乱が面として連続して、いく可能性はないか。日本ではこうした調達のやり口に当事者たちの大半がすでに気付いているが、その副作用は、中国において比にならないほど大きくなるかもしれない。

第三に、市場経済化の進行は、社会の上層部と下層部に、まったく対極的な帰結をもたらす。非正規雇用の増大は、金融や文化産業におけるごく一部のの上層層のような成功者として、圧倒的多数の下降移動層を生む。七〇年代以来のアメリカやイギリスでもそうだった。日本の「格差談義」にも言えることだが、雇用の非正規化を画一的に、上昇/下降、善/悪のいずれかで評価しようとするのは、間違いの元だと思ふ。

第三に、こうした変動はすべて、「開発主義」を採用してきた社会が、「改革」を試みることで

から生じている。「開発主義」が、民衆の意向と乖離した行政のフリーハンドをもって、傾斜的に国家投資を分配することとすれば、そこから脱却を目指す「改革」もまた、やはり「行政のフリーハンド」によって行われるというジレンマがある。

その結果生じているのは、政治に自らの意向を関与させようという、人々の意志の弱体化である。経済的な好調を続ける中国においても、経済成長の勢と、政治的無力感の鬱とでも表現すべき事態が進行しつつある。自由化は確かに、チャンスを広げる側面があるが、それは人々が自発的に選び取ったのではなく、上から推進される社会変動の結果である。

第四に、たとえれば、いまだ表面的な言論統制を行っている中国では、民衆の意志と上からの社会変動との軋轢は、日本のそれより潜在的に大きいかもしれない。

これは、宮田真司に始まり、鈴木謙介、また間接的には東浩紀などを含む、比較的若い世代の論者たちが指摘する、「監視社会」という論点を導く事柄と言え、つまり、一握りのエリートが、一般人には見えない所で社会制度を設計し、大多数の人々はその上を無自覚に動き回る存在となるような社会である。こう

出題問題 橋爪大三郎『はじめての構造主義』

『進研ゼミ高校講座 現代文 評論 テーマ』P4

株式会社 ベネッセコーポレーション 2006.1発行

テーマ1 「分節化」

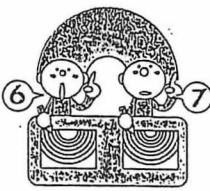
言葉によって世界は区切られている！

日本人はたつと、世界が「山」「水」「木」「草」「花」……からできあがっている、と信じている。しかし、それは、日本語を使うからそう見える、というところにすぎない。英語だと、ほかの言語を使っているときと比べて、世界は別なふうに分けられ、体験されることになる。つまり、世界のあり方は、言語と無関係でなく、どうしても言語に依存してしまうのである。われわれは、言語と無関係に、世界ははじめてから個々の事物(言語の指示対象)に区分されているもの、と思ひこみがちだ。ところが、そんなことはない。言語が異なれば、世界の区切り方も当然異なるのだ。

橋爪大三郎『はじめての構造主義』講談社

「言葉が異なれば、世界の区切り方も当然異なる」とは、どういうことなんだろう。それをわかりやすく考えるために、「虹を例にとってみよう。「虹の色は数はいくつ」と聞かれたら、たいていの人は「二つ」と答える。しかし、それは日本語の話。世界の他の地域では、虹の色を「六色」だと考える人もいれば、「三色」だと考えている人もいられる。

では、一体、虹の色はいくつと答えるのが正しいのだろうか……と考えると、どれが正しいとは言えない。わかっているのは、私たちが虹を七色に分けてとらえているからであり、「虹は六色」という地域の人、虹を六色に分



日本人(白濁)の見た虹をみると、7色になる。